

第6回 「ぼうさい探検隊フォーラム」 実施報告書



日 時：2010年1月23日（土） 13:30～16:10
場 所：KFCホール（東京都墨田区横網1-6-1）
主 催：日本損害保険協会、朝日新聞社、ユネスコ、
日本災害救援ボランティアネットワーク
後 援：内閣府、総務省消防庁、文部科学省、警察庁、
全国都道府県教育委員会連合会、アジア防災センター、
日本ユネスコ協会連盟、日本ユネスコ国内委員会

プログラム

13:00 開場

13:30 開会 主催者代表挨拶

社団法人日本損害保険協会 会長 佐藤 正敏（株式会社損害保険ジャパン 取締役社長）

13:40 第6回「ぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式

表彰：各賞のプレゼンターから代表児童・指導者へ賞状と副賞を授与

総評：ぼうさい探検隊マップコンクール審査員長 室崎 益輝氏

（神戸大学名誉教授・関西学院大学教授）

14:50 休憩

15:00 プレゼンテーション「子どもと大人のコラボレーションを地域へ！」

明治大学商学部 中林 真理子教授、大学生の皆様

板橋区立高島第一小学校 矢崎 良明校長（東京都学校安全教育研究会 会長）

浜松市立久留女木小学校 加藤 洋美先生、「チューチュー久留女木隊」の方々

15:40 メッセージ「これからの安全教育の広がりに向けて」

東京学芸大学養護教育講座 渡邊 正樹教授（日本安全教育学会 常任理事）

16:00 閉会挨拶

朝日新聞 ゼネラルマネジャー兼東京本社編集局長 木村 伊量

16:10 閉会

<< 目次 >>

主催者代表挨拶.....	P1
第6回「ぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式.....	P2～P5
総評.....	P5～P6
プレゼンテーション「子どもと大人のコラボレーションを地域へ！」.....	P7～P12
メッセージ「これからの安全教育の広がりに向けて」.....	P13～P15
閉会挨拶.....	P15
来場者アンケート集計結果.....	P16～P17

主催者代表挨拶

日本損害保険協会
会長

佐藤 正敏

(株式会社損害保険ジャパン
取締役社長)



この「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」も、今回で第6回目となります。本年度は47の都道府県全てからご応募いただき、応募作品数も1,389点と過去最大となりました。また、回を重ねるごとに質の高い素晴らしい作品が増えており、主催者として大変嬉しく思っております。こうした中、改めまして、今回入選された児童の皆様、入選おめでとうございます。保護者の方々や先生方をはじめとして、ご指導された皆様方にも、このぼうさい探検隊を実施するにあたり、大変ご苦労されたことと思えます。敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げます。

さて、近年は地球規模での気候変動の影響もあって、台風や洪水、あるいは豪雨や豪雪など巨大な自然災害が、日本のみならず世界中で発生しています。2005年にアメリカで発生したハリケーンカトリーナについては、数百億ドルを超える史上最大規模の損害額になりました。日本でも2004年に10個の台風が上陸し、大きな被害をもたらしました。また昨年7月の兵庫、岡山、福岡、山口などで発生した大雨によって大変な被害があったことは、皆さまのご記憶に新しいところだと思います。今年は阪神淡路大震災から15年目になりますが、この地震以降も新潟県の中越地震や、昨年の駿河湾を震源とする地震などが発生し、今後は東海地震、あるいは首都直下型地震などの巨大地震の発生が懸念されているところです。

損害保険はこうした災害や事故によって生じた経済的な損害を補償するという点で、安心と安全をご契約者の皆様にお届けしています。しかし、こうした災害による人的・物的な被害を抑止・軽減していくためには、行政、地域社会、国民一人ひとりが防災に対する意識を高め、備えることが重要です。日本損害保険協会では、洪水ハザードマップの調査・研究や、消防自動車の寄贈など、様々な防災活動を行っておりますが、このぼうさい探検隊は、子ども

だけではなく、地域全体の防災意識・防災力を高める活動として特に普及に力を入れております。

2011年から実施される小学校の新学習指導要領では、社会科で消防や警察などが地域の人と協力して災害や事故の防止に努めていることを学習するなど、安全教育に関する内容の充実が図られています。ぼうさい探検隊の活動を通して、子どもたちが実体験の中で暮らしの安全、安心というものを学んでいくということは、今後より重要になってくると思われれます。また、この活動の中では、参加した子ども達が防災について学ぶというだけではなく、それをサポートしていただいたボランティアの方々や地域の皆様といった多くの方々の中で、コミュニケーションが生まれてきます。そうしたコミュニケーションが、防災知識の普及や地域の防災安全意識の高揚などに役立つと考えております。本日は様々なお立場の方々からプレゼンテーションやメッセージをいただきますが、これらも小学校や団体の指導者の皆様にとって、大変参考になるのではと考えております。

さて、私自身も先日、この会場近くにある本所防災館に行きまして、震度7の地震や風速30メートルの暴風雨、あるいは煙が充満した迷路から脱出するというような疑似体験をしてまいりました。実際に体で感じることで、いざというときに備える心構え、あるいは被害が発生したときにどうすればよいのか、そうしたことに思いを馳せることができました。阪神淡路大震災から15年というお話を先ほど申し上げましたが、震災の恐ろしさというものが徐々に風化してしまうことを危惧する声も上がっております。私たちは自然災害の恐ろしさや防災の大切さを、社会に、あるいは次の世代に伝えていく責務があると考えております。皆様にとって、本日のフォーラムがこのような思いを強くしていただく一つの機会になれば大変嬉しく思います。

最後に、この活動へのご賛同と惜しみないご協力をいただきました官公庁、関係団体の皆様方、マップコンクールにご参加いただきました皆様方、そしてこの会場にお越しの皆様全てに改めて御礼を申し上げますとともに、このフォーラムが実りあるものになることを期待いたしまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

第6回「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式

第6回「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」には、全国の小学校や子ども会など297校・団体から、1,389点もの応募がありました。厳正な審査の結果、入選15作品が決定し、入賞された7団体に対して次の通り表彰を行いました。

入賞校・団体 / プレゼンター



文部科学大臣賞

受賞校・団体：静岡県浜松市立久留女木小学校「チューチュー久留女木隊」

プレゼンター：文部科学者 スポーツ・青少年局 学校健康教育課 安全教育調査官 長岡 佳孝 氏

防災担当大臣賞

受賞校・団体：徳島県三好市立佐野小学校「佐野防災8（エイト）」

プレゼンター：内閣府 政策統括官(防災担当)付参事官(統括担当)付企画官 山崎 速人 氏

消防庁長官賞

受賞校・団体：ガールスカウト日本連盟長野県第34団「もみじっ子防災探検隊」

プレゼンター：総務省消防庁 国民保護・防災部 防災課長 飯島 義雄 氏

まちのぼうさいキッズ賞（ユネスコ提供）

受賞校・団体：広島県府中町少年少女消防クラブ「府中町少年少女消防クラブ」

プレゼンター：文部科学省 大臣官房 国際課 国際協力政策室長 浅井 孝司 氏

未来へのまちづくり賞（朝日新聞社賞）

受賞校・団体：滋賀県守山市ふけ町ふるさとクラブ「びわこスマイルガールズ2009」

プレゼンター：朝日新聞 ゼネラルマネージャー兼東京本社編集局長 木村 伊量

わがまち再発見賞（日本災害救援ボランティアネットワーク賞）

受賞校・団体：香川県高松市立栗林小学校「みんな安心手だすけマスターズ」

プレゼンター：特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク 理事長 渥美 公秀

ぼうさい探検隊賞（日本損害保険協会賞）

受賞校・団体：三重県鳥羽市安楽島子ども会「安楽島キッズ探検隊」

プレゼンター：社団法人日本損害保険協会 会長 佐藤 正敏

受賞校・団体の代表児童・指導者インタビュー

<p>【文部科学大臣賞「チューチュー久留女木隊」 代表児童：和出 康汰さん 指導者：加藤 洋美先生</p>	
	<p>こうした素晴らしい賞をもらった理由は何だと思いますか？</p> <p>みんなで協力してマップを作って、地域の皆様もいろいろな場所を直して下さったりしたからだと思います。</p> <p>チーム全員、とても仲が良さそうですね。ところで「チューチュー久留女木隊」というチーム名の由来は何でしょうか？</p> <p>ねずみのように素早く静かに、というクラスの目標から名付けました。</p>
	<p>この3月で小学校が閉校という、まさに節目の年の受賞ですね。</p> <p>はい。学校として最後の年に、このような素晴らしい賞をいただけたということで、学校関係者だけでなく地域の皆様からも「久留女木の名をあげてくれた」と喜んでいただきました。</p> <p>先生から見て、児童たちの頑張りはどうでしたか？</p> <p>子ども達は本当に汗水たらしながら自転車をこいだり、山の中に入ったりして一生懸命探検し、マップにまとめていました。</p>
<p>【防災担当大臣賞「佐野防災8（エイト）」 代表児童：松丸 結愛さん 指導者：岩佐 辰也先生</p>	
	<p>防災についてのパンフレットを作って、既に地域に配っているそうですね。地域のみなさんの反応はどうでしたか？</p> <p>お年寄りの人達などにパンフレットを配るときに、とても喜んでもらえて良かったです。昔の災害の話なども聞けました。</p> <p>去年に続いて連続の入賞と聞いたときは、どう思いましたか？</p> <p>たくさんの応募の中から入賞してとてもびっくりしたし、嬉しかったです。来年も入賞できたら嬉しいです。</p>
	<p>毎年テーマを決めてマップ作りをされているとのことですが、今年のテーマと成果について教えてください。</p> <p>昨年は、防災について知ることを中心に学習を進めてきました。今年度はそれをどう地域の人たちにお返しができるか、あるいは生かしていけるか考えました。パンフレットを持って実際に地域の方をお邪魔し、生の声を聞かせていただけたところが、子ども達にとっても大変勉強になったのではないかと思います。</p>
<p>【消防庁長官賞「もみじっ子防災探検隊」 代表児童：玉舎 花梨さん 指導者：上野 良子さん</p>	
	<p>1年生と2年生で作ったマップですね。入賞したと聞いて、どんな気持ちでしたか？</p> <p>とても嬉しかったです。</p> <p>このマップをどんな人に見てもらいたいと思いますか？</p> <p>わたしが住んでいる箕輪町の人たちに見てもらって、役に立ててもらえると嬉しいです。</p>
	<p>隣組の助け合いというテーマ設定が高く評価されましたが、指導者の立場からはどういった発見や気づきがありましたか？</p> <p>ここ3年間にわたって子ども達と防災について取り組んできて、「結局のところ、最終的には隣組の方々の支え合いが大事なのではないか」ということに気づきました。そこで、アンケートを取って意識をまとめてみました。そうしたら思いがけず、たくさんの方が隣組を大事にしているということがわかり、大変嬉しく思いました。</p>

<p>【まちのぼうさいキッズ賞「府中町少年少女消防クラブ」 代表児童：森田 菜生さん 指導者：兼本 忠義さん</p>	
	<p>立体的な工夫やきれいな色使いがとても印象的な作品に仕上がりましたね。立体的にしたり、色使いをきれいにしたりして、見た目的にもきれいに作ることを頑張りました。</p> <p>まちなか探検をしてみて、どんな発見がありましたか？</p> <p>地域にもいろいろな防災の工夫があったので、もし災害が来ても大丈夫だと安心しました。</p>
	<p>ぼうさい探検隊の活動の中で、子ども達に気付かされたことや、地域の方々の変化といったものはありましたか？</p> <p>子ども達の言葉にもありましたが、自分の地域は良くやってくれているな、ということに気づかされました。また、私達の地域は、100年前に大きな水害に見舞われておりますので、そうした歴史や危険な箇所について、より多くの人々に語り継ぐ必要があるなど感じております。英文の賞状をいただき、大変感動しています。</p>
<p>【未来へのまちづくり賞「びわこスマイルガールズ2009」 代表児童：井上 珠里さん 指導者：長谷川 恭子さん</p>	
	<p>この作品は4年生2人で作ったそうですね。大変だったでしょう。</p> <p>すごく大変だったけれど、ワンワンパトロールの人たちや地域の人たちが応援してくれて、良いマップができました。</p> <p>犬の散歩のついでに地域をパトロールしてもらおうという「ワンワンパトロール」、とても良いアイデアですね。</p> <p>二人とも犬が大好きで、このテーマに決めました。飼い主さんも犬が好きな人ばかりなので、みんなで協力してパトロールしています。</p>
	<p>子ども達が回覧板を作って実際に行動し、地域の方々がそれに応えて行動に移してくれているといった点が高く評価されましたね。</p> <p>犬の散歩という身近なことをテーマにしたせいか、皆様に協力していただいて楽しく活動できました。回覧板を回したりする中で地域の方々の愛情に触れ、子ども達も地域に対して「自分達がすごく大切にされて、愛されている」ということを実感する良い機会になりました。これからも、また続けていきたいと思っています。</p>
<p>【わがまち再発見賞「みんな安心手だすけマスターズ」 代表児童：片岡 滉貴さん 指導者：太山 睦子先生</p>	
	<p>ピンク色の優しい、かわいい印象のマップですね。どんなことを話しながらまとめたのですか？</p> <p>お年寄りや、赤ちゃんを連れている人にとって、どんなものがあったら使いやすいく町になるか、そういうことを話しながら作って行きました。</p> <p>入賞した嬉しさを、どんな人たちに伝えたいですか？</p> <p>マップを一緒に作った10人の仲間と、協力してくださった地域の方々にお礼を言いたいです。</p>
	<p>栗林小学校からは入賞作品の他にも全部で18点のマップをご応募いただいております。テーマもそれぞれ変えています。指導する際に工夫された点や、苦労された点をお聞かせください。</p> <p>とても奥の深い、妥協することができない学習だと思いました。3年生5クラス、教員7名、子ども達総計で175名が5か月間かけて取組み、「昨日はこれでいいと思ったけど、今日はもっと良くしよう」の連続でした。そのため、わが子を送り出すような気持ちでマップを応募しました。</p>

【ぼうさい探検隊賞「安楽島キッズ探検隊」 代表児童：濱口 明子さん 指導者：中村 欣一郎さん



昔の伊勢湾台風と、昨年の台風とを比べようと思ったきっかけは何ですか？
伊勢湾台風が来てから今年で50年になるので、よく調べようと思っていたら、また大きな台風が来たので、それも一緒に調べようと思いました。
インタビューなどもたくさん行っていますね。ずいぶん苦労したのではないですか？

最初は、インタビューをするのが恥ずかしかったけれど、付き添いの大人達に助けてもらったので、多くのアンケートが集まりました。



今回で5年連続の入賞・入選ですね。地域の方々のしっかりした協力体制があるのではと思いますが、いかがでしょう？

町内では秋の風物詩として浸透しており、「ぼうさい探検隊」というと誰でもわかる言葉になりつつあります。毎年、夏を過ぎると「今年はまだやらの？」と大人から声があがりますが、それがこの5年のうちに「いつやってくれるの？」という言い方になってきています。子ども会が大人の皆様に頼られているようにも感じています。

審査総評

審査員長

室崎 益輝氏

(神戸大学名誉教授、
関西学院大学教授)



今回の審査も、とても大変でした。入選された15作品以外にも、本当に素晴らしい作品が非常にたくさんありました。

マップが「力」を持つようになってきた

特に今年感じたことは、「マップが力を持つようになった」ということです。小学生の皆様が作ったマップを、そのまま地域のみなさんに配っても、地域の安全に十分に役立つものになってきました。大人が印刷して作ったマップよりも、はるかに危険を知らせ、安全を伝える役割を持つようになったというふうに思っています。そういう点では、本物の砂を使ったり、立体的に山を作るなど、単に絵がきれいということを既に超えている作品もあります。子ども達の「伝えたい」という気持ちがそのビジュアルの中に表現されてきているわけです。津波に見立てた青い網をかぶせるマップなども、まさに海そのものを感じさせる作品で、これもとても感心させられました。そうした意味で、マップが本当に「力」を

持つようになったということを実感しています。

「危険な場所」だけでない、新しい気づきも

第二点は、新しい気づきがあちこちで生まれてきている、ということだと思います。

たとえば、今までは危険な場所、危ないところを調べてきたけれども、今回は安全なもの、安心できる場所を調べたという作品も多くありました。自分たちは周りの人々の絆や見守りによって支えられていることに、子どもたちが気づいているわけです。いろいろな人の目やいろいろな人の働きがあるから、安心して道を歩けるし、安心して暮らすことができる、だから大人に感謝しよう、しっかり挨拶をしよう、といった結論になっている作品もあります。まさに、子どもが社会の愛情を感じ、それが感謝の言葉という形で表れている、これも素晴らしいことだと思います。また、安心・安全なものとは何かを探した結果、小学校こそ地域の中の安心のオアシスだという素晴らしい気づきにつながっている作品もあります。

気づきの2つ目は、高齢者に対するいたわりです。多くの作品から、お年寄りに対して何らかの思いを馳せていることがわかります。マップを地域のお年寄りに配ったという事例もお年寄りへの思いが発端でしょうし、小学生とその近所のお年寄りの間に助け合いの矢印が引かれている作品なども、私は大好

きです。地域のお年寄りと自分達は一体だということを、子ども達はしっかり身を持って示しているのではないのでしょうか。また、お年寄りだけではなく、障害者のことや赤ちゃんのことまで考えている作品もありました。いろいろな人の安心・安全について、道を歩く中でしっかり理解していこうという姿勢も素晴らしいですね。そういう意味では、お年寄りを中心にした弱い人たちへの愛情が、子ども達の作品からほとぼり出ているというのが、今年の子どもの作品の大きな特徴ではないかと思えます。

緻密な学習による高い教育効果

今回の応募作品からは、学習の緻密さが特に印象に残りました。地域の危険性をしっかり調べる中で、過去の災害をしっかりと学んでいる作品が目立ちました。50年の節目にしっかり伊勢湾台風を勉強しようという作品や、宮城県沖地震のことをしっかり勉強して、それをふまえてどういうふうに分達は備えるべきかを考えた作品もあります。また、能登半島地震の教訓の中で、壊れたところがその後どうなったかを調べるなど、やはり地域の過去の災害に目をやること、これは防災にとって一番大切なことだろうと思えます。また、異常気象の影響もあるかもしれませんが、洪水や水害を取り上げた作品も増えています。他にも、防犯というテーマでも非常に充実した作品が今回はたくさんありました。街灯の数を数えたり、ガードレールの状況を調べたり、非常に細やかな調査をした素晴らしい作品もありました。津波をテーマに、津波がどこまでくるのか、地形の高さを読み込んで、自分達の足で歩いている作品なども素晴らしいと思えます。このように過去の災害を調べたり、これからやってくる災害の危険性について、単に本で勉強するのではなくて、体でしっかりとらえる、そういう作品が増えていることも素晴らしいことだと思います。

継続することの重要性と地域への効果

もうひとつ申し上げたいのは、継続して引き続きこの防災マップコンクールに応募して下さっている学校がたくさんあるということです。6年間続けて応募している小学校もあります。そうした継続した取り組みの中から、新しい発見が出てきています。例えば、去年調べて危険だと思った橋が、今年はちゃんと修理されていることを発見するなど、要するに防災対策はどう進んだかということをチェックするような取り組みをされている学校などもあります。

また、3年前の取り組みの間で何が変わったかを考えた結果、大人の防災意識が変わったことに気がついたという結論にたどり着いた作品もあります。単に見えるものだけではなく、大人の気持ちも変わってきたということに子ども達が気付くという素晴らしい成果です。このように、継続して取り組む中でいろいろな変化をしっかりと読み取るような作品も生まれており、非常に素晴らしい作品が山のように出てきたと感じています。

子どもが変われば大人が変わる、 大人が変われば地域が変わる

私はこのぼうさい探検隊を通じて、地域に大きな三つの変化が起きていると感じています。一言で言うと、「子どもが変われば大人が変わる、大人が変われば地域が変わる」ということです。1つ目の「子どもが変わる」ですが、この取り組みを行っている地域では、もしかすると子ども達が地域の安全・危険について最もよく知っているのではないのでしょうか。AEDの位置、災害用トイレや消火器のボックスの場所、子ども達はよく知っています。そうした子ども達の変化を見て、2つ目の「大人が変わる」ということが、ほんの少しずつですが着実に起きています。マップコンクールが始まると大人の意識も変わるというお話もありましたが、「子どもと大人のコラボレーション」の中心は、まさに子どもが担っているわけですから。そして3つ目の「地域が変わる」ですが、最初に申し上げたようにマップが「力」を持つようになって、ぼうさい探検隊の取り組み自体が「力」を持つようになってきました。単にマップを作るだけではなくて、それを持って町長さんに話しに行く、学校の先生に訴えに行く、地域の会長さんに話しに行くといったことを、多くの学校や団体が実践しています。その結果、道路にガードレールがつく、暗い路地に街灯がつく、危険な橋が修理をされるなど、まさにぼうさい探検隊が地域を既に変えていることを確信できるようになってきました。この取り組みは単なる子ども達の教育の枠を超えて、地域づくりの大きな力になりつつあるのです。

最後に、私がとても嬉しいのは、今年度は初めて全ての都道府県から作品の応募があり、1万人を超える子ども達がこのマップコンクールに参加してくれたということです。本当にありがとうございますと御礼を申し上げて、総評とさせていただきます。

「ぼうさい探検隊」大学授業での取組み事例紹介

明治大学商学部 教授
中林 真理子氏



商学部 3・4 年生

依田氏
近藤氏
米倉氏



中林氏：明治大学商学部では、文部科学省の平成 20 年度「質の高い大学教育推進プログラム」に採択された「地域産学連携による自主自立型実践教育」の一環として、ぼうさい探検隊を後期の授業に取り入れました。学生達による事例紹介をお聞きください。

依田氏：私達は、昨年の 9 月末からこのぼうさい探検隊という授業に参加し、多くのことを学びました。その内容について、発表をさせていただきます。



私達大学生は、お兄さん・お姉さんとしてぼうさい探検隊に参加し、小学生のお手伝いをしていきました。活動を行うにあたり、大学生側の目的は大きく 2 つ、「教育力」と「コミュニケーション力」の向上を挙げました。「教育力」というのは、大学生から小学生に対して教えていくという教育と、小学生から大学生が気付きをもらうという意味での教育、そして大学生同士で意見交換し意識を高めるという 3 つの方向性を意味しています。また、「コミュニケーション力」というのは、自分達とひと回り以上も年齢の離れた小学生や地域の方々と一緒に、一つのものを協力して作り上げることを意味しています。

10 月には、実際に千代田小学校の子ども達とまち歩きを行いました。小学生 4~5 人に大人が 2 人つく

形で、小学生と一緒に和気あいあいと進めていきました。その中で、小学生がみんなで一生懸命マップを作る姿に刺激され、大学生もマップを作ってみようということになりました。大学生なりに調査を行い、議論を繰り返して、子ども達に負けないようなマップができたのではと思っています。



近藤氏：この大学生版マップの内容をご紹介します。いろいろな設備について、子ども達が発見したこと、思ったこと、わたしたちが気付いたこと、感じたことを 4 項目、マップの中にまとめてみました。その中から 2 項目をご紹介しますと思います。



これは消火器についての部分です。私達は気にもとめていなかったのですが、子ども達は消火器の箱が 2 種類あることに気付いていました。調べてみると、赤と銀の二種類があり、赤いほうを開けると通報ベルが鳴る仕組みになっているとわかりました。子ども達の気付きのおかげで、私達には考えることもできなかったことを知ることができました。

また、千代田小学校の備蓄倉庫にもお邪魔させていただきました。子ども達だけではなく、私達も多くの必需品や災害のための備品があることに驚きました。また限られたスペースにいろいろなものが置

かれているのを見て、もっと使いやすくできないかなとも感じました。こうした備蓄倉庫が千代田区に何箇所ぐらいあるのか気になって調べてみたところ、50箇所以上もあることがわかり、これだけあれば万が一災害が起きたときでも安心だなと感じました。



このように調べていく中で、わたしたちが気付いたことを何か役立てることができないだろうかと考え、ご提案としてまとめてみました。

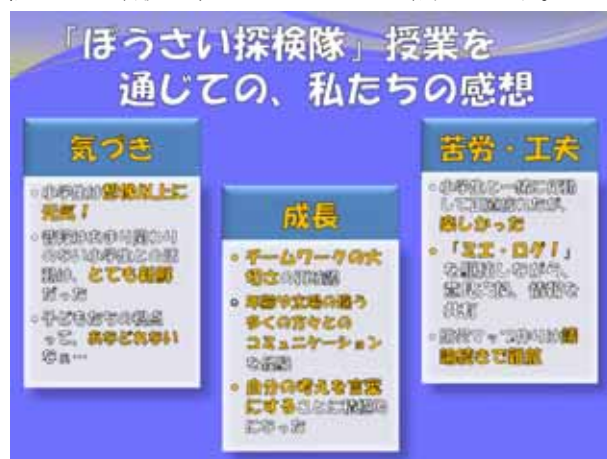
米倉氏：では、3つの点について、わたしたちが気付いたことや感じたことをご紹介します。皆様にも一緒に考えていただければと思います。

1つ目は消火栓についてです。まちなか探検の中で、消火栓の上にゴミが積まれている場所があり、もしものとき、ゴミが邪魔になりそうと感じました。そこで、「目につきやすい場所に消火栓の存在をよりはっきりと表示できないか」というご提案を考えてみました。もちろん、新しく表示を設置するというのは時間も費用もかかりますので、付近の住民の方々に対して意識付けをしていくことも大切なのではと思いました。会場の皆様も、是非ご自宅近くの消火栓などをもう一度チェックしていただいて、万が一のときに本当にすぐに使えるかどうかを考えてみていただければと思います。

2つ目は備蓄倉庫に関する内容です。倉庫内には多くのダンボールが積まれています。例えば災害のときに、私達がボランティアとして備蓄倉庫でお手伝いをするような場合、欲しいものをすぐ見つけるのは難しいのではとも感じました。そこで「備蓄倉庫のどこに何があるのかがすぐに分かるようなリストや配置図があればもっと良いのでは」というご提案を考えてみました。もちろんこれも、備品の入れ替えなどの際に、リストや配置図を毎回更新する手間がかかると思われます。しかし、万が一の時、私達のような一般のボランティアがお手伝いをする場合も考えて、ご検討いただけないかと思います。

3つ目も、備蓄倉庫に関する内容です。倉庫の中では重そうなダンボールが高いところにも置かれていました。震災時に備蓄倉庫内で作業をしていて、もし余震がきた場合、重いダンボールが降ってくるのではと不安になりました。そこで「備品が落下しない工夫はできないだろうか」というご提案を考えました。もちろん、既に対策が実施されていれば安心ですが、たとえば費用をかけない対策として、重いものは下の棚に積みなおすといった作業ならば、私達大学生でもお手伝いできるのではと思います。

依田氏：最後に、私達の感想をご紹介します。



まず、子ども達と一緒に活動することは、とても難しかったです。子ども達の話題についていけなかったり、気付いて欲しい防災設備になかなか気付いてもらえなかったりと、苦戦したメンバーも多かったようです。しかし、子ども達の視点で初めて気付かされたこともたくさんあり、「正直、子どもって侮れないな」といった感想も多く聞かれました。

また、この授業では、「ミエ・ログ！」というインターネットのブログシステムを使っていつでも情報発信できる環境にありました。そのせいもあってか、他の授業に比べて、自分から意見を出していく機会がとても多い授業だったことも、非常に新鮮でした。

私達はこの授業で、自分の周りの人々や地域に積極的に関わって、自らを成長させていくということを学びました。こうした姿勢を社会に出ても持ち続け、自分を高めていきたいと思っています。

最後に申し上げたいのは、防災に対して全くの素人である大学生と小学生が、たった30分注意してまちを歩いただけで、これだけ多くの発見があったということです。是非皆様も、お帰りの際に少し意識して、発見してみてください。その発見が、まちの安全に大きな意味を持つのではないのでしょうか。

学校管理者の立場からの先進的な防災教育事例の紹介

東京都板橋区立
高島第一小学校 校長

矢崎 良明氏

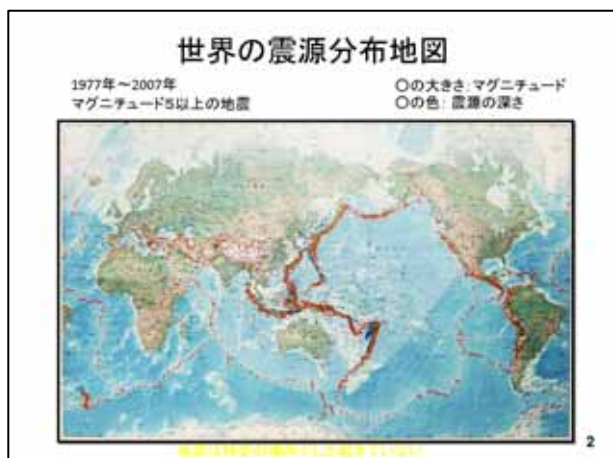
(東京都学校安全教育研究会
会長)



地震防災に関する本校の取組みについて、お話をさせていただきます。

避難訓練と言いますと、多くの学校では、職員室の先生がウーッとサイレンを鳴らして「訓練、地震です。児童の皆様、机の下にもぐりましょう」と放送します。子ども達が机の下に入ってしばらくしてから「地震がおさまったようです。余震に備えて皆様校庭に避難してください。避難開始」と放送し、校庭に避難してそこで点呼をする、このような形の避難訓練が多いのではないのでしょうか。しかし、ここでふと考えてみますと「何かおかしいな」と感じるところがあります。地震が既に来ているのに、サイレンを鳴らして「地震です、地震です」と放送し、机の下にもぐりましょうというのは、どう考えてもおかしいですね。直下型の強い地震がグラッと来ていたら、放送なんて全然間に合わないわけです。したがって、やはりこの部分を何とか改善しなければいけないと考えました。

また、以前に日本海中部地震があった際に、それを体験した子ども達がかつて地震について知識を持っていれば、もう少し避難の仕方が変わったというアンケート調査もありました。そこで、子ども達に地震に対する正しい知識を与えながら、地震に対する避難訓練を改善するという試みを行ったわけです。



本校は、東京大学地震研究所の地震防災推進プロ

グラムと、首都直下地震防災・減災プロジェクトの2つに協力させていただいておりますが、この東京大学地震研究所の地図を見ますと、日本の陸地の面積というのは、実は世界の陸地の面積のわずか0.28%にすぎません。ところが、地震は世界の10分の1、10%近くが起きています。ということは、日本に住んでいる限り、地震があるのは当たり前だと思わなければならないわけです。こんな広い世界の地震のうち10分の1が日本で起きている、こういう実態を子ども達に見せて、やっぱり地震が多いのだから、地震対策、備えをしましょうという授業を行っています。

その次に、地震というのは一体どのくらいの確率で起きているのかということです。これは防災科学技術研究所が出した、海溝型地震、つまり海の中でプレートが潜りこんで起きる地震の予測図です。



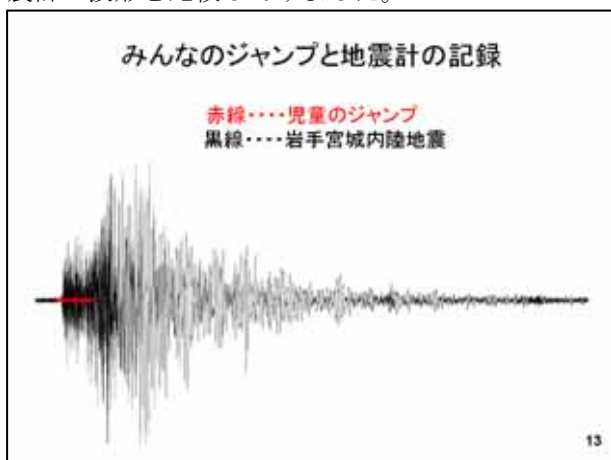
いま話題になっている想定東海地震は30年以内に87%起きますよ、といったことが示されています。他の災害や事故と比べますと、例えば、交通事故で負傷する確率は30年間で26%しかありませんし、台風や大雨で亡くなる確率は0.1%以下、ガンで死亡というのも10%あるかないかです。こうしたものと比べますと、いかに地震の確率が高く恐ろしいかということを実感いただけるのではないのでしょうか。

本校では、地震防災教育ということで、子ども達が緊急地震速報がどういう仕組みなのかをある程度知っていなければいけないと考えています。また、先生方にも地震が発生したときの各自の役割があることを認識していただく必要があります。つまり、関係者の安否確認、被害状況の確認、教育活動の再開、避難所、こうしたことについて、学校として取り組まなければいけないわけです。

さて、先ほどもお話ししました首都直下地震防災・減災プロジェクトの関係で、本校にも高感度地震計というものが地下 20 メートルのところに埋まっています。これを使わない手はないだろうということで、子ども達に「この地震計で地震を起こしてみよう」と呼びかけて、ジャンプ大会を行いました。



グループごとにジャンプをすると、この壁のところにリアルタイムで地震の波が映るわけです。「私たちのグループが一番だ」などと言いながら起こした地震のデータを教室に持って帰って、次は実際の地震計の波形と比較してみました。



ここの赤い部分が、子ども達がジャンプして起こした地震です。地震計のすぐそばで思いっきりジャンプをしてもたったこれだけの大きさです。ところが、黒い部分は岩手・宮城内陸地震を本校で観測したときのデータなのですが、遠く何 100km も離れたところで起きた地震が、こんなに大きなエネルギーとして自分達のところに伝わってきているわけです。いかに本当の地震のエネルギーがすごいのかということを、子ども達はこれで実感したわけです。

次に、今度は緊急地震速報の仕組みです。これは P 波と S 波の伝達速度の違いを利用しているわけですが、「実際に P 波と S 波を見てみよう」というのが次の授業です。

東大地震研にご協力いただき、このような実験装



置を体育館に設置して実験してみました。縦・横・斜めに振り子を揺らすと、縦の波つまり P 波は、面白いことに、本当に横の波 (S 波) より先に伝わります。それを子ども達が実際に観測しながら体で理解して、これを利用して緊急地震速報が出るということを勉強しました。

さて、こうしたことを踏まえて、本校の避難訓練をご紹介します。本校では、職員室からの放送の代わりに緊急地震速報を鳴らすわけですが、事前に「物が落ちてこない・倒れてこない場所」を探しておきます。緊急地震速報の後にカウントダウンをして、そこで地震の効果音を流します。このときに子どもが安全な場所に身を寄せておくこと、これが避難だよという訓練をしているわけです。



例えば安全な場所としては、柱と柱の間とか、机の下や校庭もありますね。右下は音楽室ですが、大きな柱の脇で音楽の道具をかぶるなど、子どもが本当に自分で考えて危険を回避しているわけですね。

最後のまとめとして、やはり避難訓練は大きな地震の教訓を得て、子ども達が地震に対する知識と実情に即応した訓練をすることが大事だと思います。2月 12 日に本校で全国学校安全教育研究大会が開かれ、これらの実験等を実際にご覧いただけますので、ご興味のある方はどうぞお越しください。

ぼうさい探検隊 実践校での指導教諭と児童の「生の声」

静岡県浜松市立
久留女木小学校 教諭

加藤 洋美氏



チューチュー久留女木隊の方々



では、今年度の文部科学大臣賞を受賞されたみなさんに、ロングインタビュー形式でお話をうかがってまいります。まず、加藤先生から自己紹介をお願いいたします。

加藤先生：はい。私は浜松市立久留女木小学校、3・4年生複式学級の担任をしております加藤と申します。こちらは「チューチュー久留女木隊」オールキャストです。それではご挨拶しましょう。

児童達：よろしくお願ひします！！

ありがとうございます。とても元気な4名の児童のみなさんにお越しいただきました。では早速、「チューチュー久留女木隊」唯一の男性隊員、4年生の康汰さんに伺いましょう。ぼうさい探検隊のリーダー役として、大変だった事は何ですか？

康汰さん：みんなの意見をまとめるのが、とても大変でした。



たしかに、4人とも個性的ですよ。さて、康汰さんは3年生のときもこのマップ作りに参加したそうですが、今年度はその前の年と比べてどういう工夫をしましたか？

康汰さん：前よりも多い場所を回ってインタビューをしました。その分、書くことも多くて大変でした。

素直な感想ですね、ありがとうございます。マップからは、非常に丁寧に調べたことが伝わってき

ますね。

では次に、3年生の夕夏さんにお話を伺います。マップ作りの中で、どういう部分を担当しましたか？

夕夏さん：私は、一番上のタイトルのところを派手に目立つようにしようと頑張りました。



確かに、色もきれいで、模様もついていますよね。非常にインパクトのあるタイトルになっています。さて、夕夏さんはまちなか探検をしていく中で、得意になったこと、上手になったことがあるそうですね。それは何でしょう？

夕夏さん：自転車でいろいろな所を探検したので、自転車に乗るのがうまくなりました。

ぼうさい探検隊のおかげで自転車もうまくなったとは、思わぬ効果があって良かったですね。

では、同じく3年生の樹音さんにお話を伺ってみましょう。樹音さんはマップ中の多くの写真に映っていますね。実験の写真も入っていますが、どんな実験をしたのか教えてください。

樹音さん：学校の近くにある急な坂が、上ったらすぐ下り坂になるので、向こうから来る車が見えないという実験をしました。



なるほど、学校のすぐそばにかなりの傾斜の坂がありますが、子どもの姿はかなり近くに来るまで車からも見えないですよ。実際にどう危険なのか、実験して確認したわけですね。他には、マップのどの部分を担当しましたか？

樹音さん：絵や文を一生懸命、きれいに書きました。

マップの中にある丁寧なかわいいイラストの大部分は、樹音さんが描いたそうですね。よく頑張りましたね。

では続いて、3年生の捺美さんにお話を伺いましょう。まちなか探検の中で、防災備蓄倉庫の中も見学していますが、どんなものがあったか教えてください。

捺美さん：大きな水のタンクや、生活のための毛布とか、お鍋がありました。



地域の方々の分も含めて、たくさんの資材があったそうですね。ところで、マップの真ん中あたりに「久留女木小学校を残して！」というみなさんの強いメッセージが書かれていますよね。これは、どうしてでしょうか？

捺美さん：久留女木には山や坂がいっぱいあるので、ドクターヘリが降りられるところがなく、久留女木小学校の校庭にしか降りられないからです。

なるほど、久留女木という地域は本当に坂が多くて、小学校の校庭ぐらいしか平らなところはありませんよね。実際にドクターヘリが来たのを見たことはありますか？

捺美さん：去年の夏休みに、近くの川で溺れた子がいたときにドクターヘリが来ました。つい2週間前にも来たんですよ。



1年のうちに2回も、ドクターヘリが来たんですね。久留女木小学校は今年度で閉校となり、校舎や校庭をその後どうするかというのはまだ決まっていらないのですが、今のお話を伺って、確かに小学校の校庭は残さなくてはいけないというみなさんの強い想いがよくわかりました。

では、加藤先生に少しお話を伺いましょう。まず、このぼうさい探検隊という活動を通じて、児童のみなさんの成長や気付きにはどういったものがあったのでしょうか？

加藤先生：6月から、主に自転車に乗って地域の中をくまなく調べました。地域の皆様に危険な箇所をインタビューしたり、実際に危険と言われているところに行ってみて、本当に危険な場所なんだということを確認したりしました。久留女木という地域は、野生の動物は多いし、がけ崩れがあるなど危険がいっぱいの場所です。ですが、去年までがけ崩れのままだった道が直されていた、地域の人が「秋のママ

シは子を持つから危ないよ」と教えてくれる、そんなふうに分達がこんなに安全に暮らせるのは地域の人のおかげなんだ、ということが実感できたようです。ますます久留女木が大好きになったという気持ち子ども達の中でうんと大きくなったというのが、一番の成果だと思います。

なるほど、ありがとうございます。みなさんで作ったマップは非常に素晴らしい作品ですが、このマップをこれまで活用した結果や、あるいはこれから活用されるご予定などがありましたら、教えていただけますか？

加藤先生：毎年一度、「交通安全を語る会」というものがありまして、学区内の危険箇所を子ども達が発表をして、浜松市の方や地域の自治会の皆様、警察の皆様、ここが危険だから直してくださいとお願いをする機会があります。今年度もそういうお願いをして、浜松市にご検討いただいたりしています。また、1月末には、久留女木小学校の学習発表会がありますので、そのときに地域の皆様へ「私達のために安全に暮らせるように守ってくれてありがとうございました」ということを伝えていきたいと思っています。



なるほど、既に実際の地域への働きかけにマップを使っているんですね。3月の成果発表会で保護者の方にもお伝えするというお話も伺っています。是非今後もいろいろところで活用していただけたらと思いますし、その価値がある素晴らしいマップになっていると思います。

では最後に、全員にお伺いします。みなさんは、4月から違う小学校に通うことになりましたよね。その小学校でも、またこのぼうさい探検隊をやってみたいと思いますか？

先生・児童達：はい！！

一大きな声で力強いお返事をいただきました。ありがとうございました。

メッセージ「これからの安全教育の広がりに向けて」

東京学芸大学
養護教育講座 教授

渡邊 正樹氏

(日本安全教育学会 常任理事)



本日は、表彰式そしてプレゼンテーションと、非常に素晴らしいご発表を拝見し、とても感銘を受けました。小学生の皆様が学校や地域のためにこれだけ大きな力となっているということが大変心強く思っております。私からは、「これからの安全教育の広がりに向けて」と題して、少しお話をさせていただきます。

さて、15歳以下の子どもの外傷による死亡率を表している地図がありますが、これによりますと日本は死亡率が一番高い国々の中に分類されています。日本は乳幼児死亡率では世界でもトップクラスに低い、言うなれば「世界で最も健康な国民」といえま。ところが、ケガによる死亡率は先進国の中では数値が高いのです。この分類データは2002年のものですので、実際はこの後かなり改善されており、今では日本も先進国の平均並みにはなっていますが、つい最近までこういう状況にあったわけです。ですから、事故や事件、またそれによるケガというのは、日本人にとって非常に重大な問題ということが言えると思います。

私達が生活していく上での健康や福祉、福祉は私達の幸福と言い替えてもいいと思いますが、それが何によって支えられているかという、「安全」によって実は支えられているわけです。世界保健機関が作成したセイフティプロモーション、つまり安全を推進していく基本的な考え方を示している図がありますが、その中でも、安全というのは健康や福祉を支えている大きな基盤だということが示されています。この安全が損なわれると、一瞬にして健康と幸福を失ってしまうかもしれない、ということなのです。

今年で15年になりますが、阪神淡路大震災が起きたとき、私は実は兵庫県に住んでおりました、あの揺れを経験し、災害を目の当たりにしています。それまでの普通の生活が、あの揺れで一瞬にして失わ

れてしまったということ、この目で見えてきました。そういう意味で、「安全」というのは私たちの生活の中で非常に大切で、本当に重要なことだということはおわかりいただけることと思います。

地震の例を出しましたが、地震そのものを防ぐことはできないものの、地震に備える、地震による被害を小さくするということができるわけです。そのためにはどうしたらいいかというと、環境を整備する対策、そして行動としての対策があります。環境を整備するとは、たとえば地域や学校で地震災害に対して耐えられるように備えていくことです。耐震構造がしっかりとした建物を造るということもありますし、地震が起きたときの避難場所の整備がそうです。行動としての対策とは、家庭や学校での危機的な状況で、一人ひとりがどういう行動をとるのかということです。これらが、安全のために必要な2つの柱になっているということなのです。

学校関係者の皆様はよくご存知だと思いますけれども、2009年4月に「学校保健安全法」という法律が施行されました。これは新しい名称の法律ですが、実はそれ以前は「学校保健法」という名前で、主に健康を扱う法律でした。これが「学校保健安全法」という名前が変わり、学校における様々な安全に対する対策というものが盛り込まれました。例えば「危険発生時対処要領」というものがあります。少し難しい言葉ですが、これは学校の先生方はよくご存知のように、危機管理マニュアルのことです。危機管理マニュアルを作って、危機的な状況のときに適切かつ迅速に対応できるようにしておくことが、法的に義務付けられたということです。

もう1つ重要なことは、地域との連携です。一例として、地域で行われている様々なボランティア活動と一緒にあって、地域で子どもを守っていこうという活動があります。学校が中心になって行う場合もありますし、地域が主体となっている様々な活動もあります。学校だけで行うのではなくて、地域とうまく連携を取って進めていくことが大切だということが言われています。インターネット上にはこうした活動をまとめたデータベースがあり、その中で子ども達を見守るためにどんな活動をしているかという事例を全国から探すことができます。自分の住んでいる地域ではどんなことができるだろうか、

あるいは何か活動が行われていないだろうかということを知ることができるわけです。

そして、「学校保健安全法」の中にもある学校安全計画です。これはほとんどの学校でも作られていると思いますが、学校の中での安全教育・安全管理・組織活動、これらをどうやって進めていくか、どういう内容を取り挙げていくかということについて、この計画で決めます。特に安全教育については、文部科学省の中央教育審議会から答申が出ていますが、その中で危険予測能力と危険回避能力を身に付けるということが書かれています。本日のぼうさい探検隊の事例からも、危険を予測し、回避するというたくさんの情報がマップの中に示されていることがわかります。この情報というのは、学校での活動だけにとどまらず、家庭で「こんなことをやったよ、こんなことを知ったよ」というようなことを話すだけでも、大きな広がりが出てくると思います。

さて、危険予測・回避能力を身に付けるには具体的にどんなことをしていくかについてお話しましょう。本日のフォーラムの中でご紹介いただいた多くのマップでも、まちの中を歩いて危ない場所を見つけたり、逆にここは安全だという所をたくさん見つけていましたが、ここでは日本学校保健会が作成した小学校のケガ防止の教材をご紹介します。例えば、普通に公園に行って何となく見ていると、危ない場所というのはなかなか気がつかないかもしれません。ところが、公園内の異なった場所を比較してみると、池の脇の歩道で手すりがあるところと、手すりなど何もないところがあります。「手すりがないと落ちてしまうかもしれない」ということに気付くかもしれませんね。また公園の同じ場所でも、昼間だと明るくて周りがよく見通せますが、夜になると真っ暗で何にも見えなくなります。そうしますと、昼間にはわからなかった危険なことが見えてきます。例えば、「暗くなったら気を付けて皆で一緒に帰ろうね」ということもできるでしょうし、「こんなに暗いのなら街灯をつけてほしいよね」という話になります。本日のご発表の中にも、ぼうさい探検隊の活動を通じて、様々な地域の様子が変わってきた、改善されてきたというお話もありましたね。このような学習をすることによって、子ども達自身の行動も変わってきますし、子ども達や学校、地域を取り囲んでいる状況や環境というものも改善の方向に持っていくことができます。ですから、こういう危険予測・回避の学習は子ども達自身の力をつけると同時に、その

地域を変えていく力にもなっていくというわけです。

危険予測・回避の学習というのは、危険な場所や行為に気付くということ、危ないものは何だろうということに気付くことから始まります。もちろん、危ないものとすぐ気付くこともありますし、地震災害のように地震の揺れが起きて初めてそれが危険だとわかるものもあります。ですが、その危険の内容がわかっているならば、例えば地震が起こる前に高いところに何か物を置いておくのは危ないということがわかる、つまりどんなことが起こるかが予測できます。それが危険予測の学習です。そうしますと、それを避けるために何ができるだろうかという危険回避の学習ができるのです。このような学習は子ども達自身の学習にとどまらず、たとえば、どういったら夜でも暗い公園を安全に通れるだろうかというような周辺環境の問題となってきます。つまり、全ての人が安全について学ぶ必要があるということです。ぼうさい探検隊で行ったことについて家庭でお話をする、そうするとその話題が今度は家庭から職場や地域へ広がるかもしれません。そのように、全ての人達が安全について学んでいこうということです。

つい最近も、ハイチで大きな地震災害がありました。地震の多い日本では決して人ごとではありません。もちろん日本は地震が多い故に、それに対するいろいろな対策を行っていますが、実際の地震などがありますと、どうやって対策をしていけばいいか、どんな備えをしていけばいいかというのを改めて感じると思います。ですから、世界で起きている様々な事柄について皆で考えていくこと、それが安全に行動していくことにつながっていきますし、安全な社会づくりに参加するということなのです。もしかしたらまだお気づきではないかもしれませんが、実は今日ご発表いただいた小学校や団体の児童の皆様は、既に社会の安全づくりに参加されているわけですね。この参加していくということ、長く続けていくことによって安全な社会づくりにつながっていくということになります。

こうした一方で、危険について様々なことを学習することで、余計な不安をあおるのではとご心配される方もいらっしゃるかもしれません。ここが危ない、そこが危ないとばかり言っていると、社会に対してすごく不安だなという気持ちになるのでは、と。しかし、実はそうではないのです。本日ご紹介いただいたマップの中にも、子ども達を守ってくれる場

所がある、人がいることをたくさん発見されてしまったね。つまりはそれらも、危険を回避するという一つの活動であり、環境づくりなのです。危険なものには目をつぶったほうが安心といった気持ちになりがちですが、危険なもの・ことを知ることで、逆に本当に安心できる社会、こうすれば本当にみんなの命を確実に守ることができるということを知ることにつながっていくわけです。「これからの安全教育の広がりに向けて」ということで、学校間での広が

閉会挨拶

朝日新聞
ゼネラルマネジャー兼
東京本社編集局長

木村 伊量



長時間にわたる本フォーラムにお付き合いいただき、皆様本当にありがとうございます。私自身は、非常に温かい気持ちが胸いっぱい広がっています。何点か感想めいたことを申し上げて、閉会の言葉に代えさせていただきたいと思います。

本日はたくさんの作品や事例を目にさせていただきました。本当にどの作品も優劣をつけがたい、素晴らしく力のかもった、アイデアにあふれた作品揃いだったことに、非常に強く感動いたしました。とりわけ、耳で感じ、目で感じ、心で感じて、まちのどこが、何が危ないのかといったことを、一つ一つ自分の目をつぶさにとらえて、現実起きたこと、起ころうとすることに想像力を働かせて、それをマップに落とし込んでいく力というのは並大抵ではないと驚きました。先ほど室崎先生から「マップが力を持った」というお話がありましたが、私もそういうことなのかなと思いました。私は長い間、新聞記者をしています。これは日々起こったことを調査して事実が何かということ突き詰めて、それを報道していくという仕事です。そういう点では、皆様は十分に力を持った一人前のジャーナリストの素質があるなと感じています。できることなら明日から新聞社で働いて欲しいと思ったぐらい、非常に素晴らしい調査能力と、それを丁寧に周囲に伝えていく姿勢を感じることができました。

りだけではなくて、家庭から、地域、職場へどんどん広げていって、地域全体、更には国全体、更には世界に向けて、日本はこれだけ安全なことをやっていますと言えるような国にさせていただきたいと思います。

最後に、これからの皆様のご活躍、ご発展を心から祈念しております。ありがとうございました。

またそれ以上に強く感じましたのは、お年寄りや弱い立場にいる人へのいたわりのまなざし、優しい心です。これはここに本日お集まりになった方々や応募をされた方々に共通して流れていることなのかなとも思いました。今は新聞を開いても、嫌なこと、暗いこと、いろいろな事件ばかりで、日本の今後を心配したり、心を痛めることが多いかもしれません。ですが、展示作品を見ながら、あるいは皆様の心強いお話を伺いながら、日本も捨てたものではない、若い力というの存分に芽生えてきていることを感じました。こうしていろいろな世代の方々と手を携えて、更に良い地域、コミュニティをつくっていけば、この国の未来だって捨てたもんじゃないぞ、という非常に明るい元気な気分を一日を過ごすことができ、本当に感謝を申し上げたいと思っています。世界を見ますと、今はカリブ海の小さな国のハイチが大きな地震に見舞われて、小さな子ども達も、命をなくしたり、ケガをしたりと大変な状況になっています。会場内の小学生のみなさんも、このぼうさい探検隊の記憶や想いを更に広げて深めていただいて、大人になっても世界の隅々で起こっていることに想像力をこらすような優しい大人になってくれれば、更に日本は良い国になるなと思っています。

最後になりましたけれども、本日ご来場いただきました皆様、保護者や指導者の方々、そして地域で支えてくださった皆様、本日のフォーラムの成功に向けてお力添えをいただきました全ての皆様に心より感謝を申し上げ、このぼうさい探検隊が更に大きな力を持って日本中に広がることを心より願っています。主催者を代表しての言葉に代えさせていただきます。

来場者アンケート集計結果

参加人数：270名 アンケート回収数66枚 回収率：24.4%

回答者性別：男性 43名、女性 22名（無回答1名）

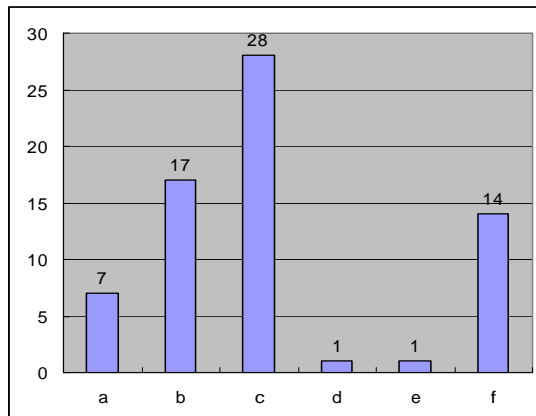
回答者年齢：10歳代 1名 20歳代 14名 30歳代 14名 40歳代 11名
50歳代 16名 60歳代 7名 70歳代 1名 80歳代 1名（無回答1名）

回答者所属：教育関係者 14名 消防・警察関係者 13名 学生 7名
行政関係者 2名 損保関係者 10名 その他 19名（無回答1名）

Q1. 今回のフォーラムを何でお知りになりましたか？ （複数回答あり）

- a. 当協会のホームページ・・・・・・・・・・ 7名
- b. 開催チラシ・・・・・・・・・・ 17名
- c. 友人・知人・出演者の紹介・・・・・・・・ 28名
- d. 新聞・・・・・・・・・・ 1名
- e. メルマガ・・・・・・・・・・ 1名
- f. その他・・・・・・・・・・ 14名

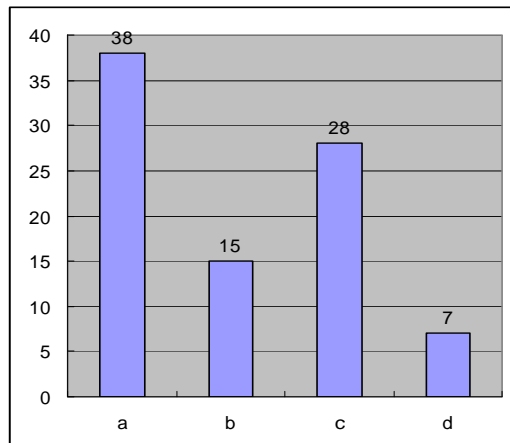
（ボーイスカウト事務局ニュース、消防署の紹介、ちよだボランティアセンター広報誌、県庁からの案内 等）



Q2. 今回のフォーラムに参加された動機（理由）を お聞かせください。（複数回答あり）

- a. テーマに興味があった・・・・・・・・・・ 38名
- b. マップコンクール表彰式に興味があった・・・・ 15名
- c. プレゼンテーションやメッセージの内容・
出演者に興味があった・・・・・・・・・・ 28名
- d. その他・・・・・・・・・・ 7名

（「ぼうさい探検隊」の活動実態に興味があった、子ども達の作品を見てみたかった 等）

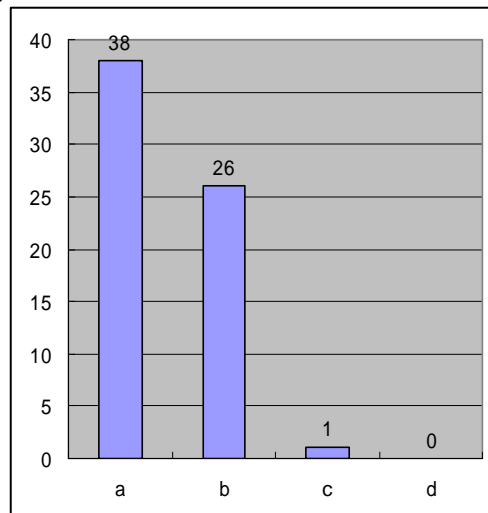


Q3. 今回のフォーラムの感想はいかがですか？（無回答1名）

- a. 大変興味深かった・・・・・・・・・・ 38名
- b. 期待どおりであった・・・・・・・・・・ 26名
- c. やや期待はずれであった・・・・・・・・ 1名
- d. 期待はずれであった・・・・・・・・・・ 0名

<a,bの主な理由>

- ・子ども達を中心となって地域の安全や安心のことを調べ、その成果を地域へ還元していくといった過程が素晴らしい。
- ・子ども達のマップの工夫など、大人では考えつけない視点を見ることができた。子ども達が地域のことや防災について、これほど考えているということに感動した。
- ・地域の防災行動力向上に非常に有効なものと感じ、今後も広く活動が行われるといいと思う。



- ・子ども達へのインタビューがほほえましく、進行もスムーズで良かった。プレゼンテーションもそれぞれ簡潔にまとめられ、分かりやすかった。
- ・子どもの感じ方と大人の感じ方に多くの違いがあることがわかった。自然災害が多く聞かれる今、こういった取組みはとても大切だと思った。
- ・「ぼうさい探検隊」の活動が、地域と結びつく一種のコミュニケーションツールとなっている。活動の結果、様々な形で自分達は守られているという地域への感謝に多くの子どもが気付けたのは、とても素晴らしいことと思う。
- ・久留女木小学校の子ども達の話（インタビュー）が興味深かった。今話題のドクターヘリとの関係も知ることができた。

Q 4 . 今回のフォーラムで特に印象に残った内容を簡単にお聞かせください。

- ・子ども達の取組みと、それを支える周囲の協力・理解こそが、地域コミュニケーションそのものだと思う。
- ・緊張しつつも誇らしげな、表彰式での子ども達の表情が印象的。指導者インタビューも良かった。
- ・室崎教授の「子どもが変われば大人が変わる、大人が変われば地域が変わる」という話が新鮮だった。
- ・子ども達の作品は、どれもとても良くできていたと思う。この取組みで学ぶこと、気づいたことがたくさんあったのでは。また、大学生の提案も良かった。気づいたことを、今後に役立ててほしい。
- ・矢崎先生のプレゼンテーションが印象的だった。今まで、なにげなく型どおりの避難訓練を行っていたが、地震予測が発達し緊急地震速報もある今、もう一度見直す必要があると感じた。
- ・「チューチュー久留女木隊」のインタビューコーナーは、子ども達も楽しそうでイキイキしていた。
- ・渡邊教授の「日本では15歳以下の子どもの外傷による死亡率が大変高い」という事実には驚かされた。
- ・プレゼンテーションとメッセージの部分のテーマが良かった。

Q 5 . 今回のテーマ「防災教育から防災共育へ ~子どもと大人のコラボレーション!~」について、普段感じていること、あるいは地域や家庭で実践していることなどがありましたらお聞かせください。

- ・学校で防災教育をしているが、先生達も防災について意識を高め、子どもたちに教育してほしい。
- ・親子で話し合うこと、素直に見る目を大切にすることを心がけている。子どもの感性を大切に、「一人前」として対等に接したい。
- ・防災と減災のためには、自助・共助・公助それぞれが機能することが大切であり、「ぼうさい探検隊」の取組みを自分の地元でも行ってもらいたいと思った。
- ・“防災”と言いつつも、防災はあくまでの切り口のひとつであり、要は“地域力”の向上につながっていると感じている。
- ・地域のお年寄りや大人・大学生達と子ども達が一緒になって、防災について考えることの大切さを、改めて感じた。家庭内だけで災害時の集合場所を確認するのではなく、これからは地域のため、近所の人達のために自分たちができることまで、踏み込んで話し合っていきたい。

Q 6 . 損保協会では、今後の安全教育や啓発を進めていくうえで、協力先や連携先を検討しています。ご所属の学校や団体として、損保協会との協力や連携に関するアイデアがあればお聞かせください。

- ・このようなマップコンクールを、ぜひ続けて欲しいと思う。
- ・大学で「ぼうさい探検隊」の講義が増えれば、大学生のコミュニケーション不足も解消されるのでは。
- ・総合防災教育の中で行っているマップ作りの目標として、今後の応募などを検討していきたい。
- ・最後に渡邊教授が話していたように、これからも授業を通して続けることが大切だと思う。
- ・地域の担当者などを通じて、同じような活動を行っている団体と交流できればよいのと思う。
- ・地域活性化に向けて、町内会の防災関係者などをお招きして話をしてはどうか。



社団法人 日本損害保険協会 会員会社一覧
 (50音順、2010年2月現在)

あいおい損保	スミセイ損保	日新火災
朝日火災	セコム損害保険	ニッセイ同和損保
アドリック損保	セゾン自動車火災	日本興亜損保
アニコム損保	ソニー損保	日本地震
イーデザイン損保	損保ジャパン	日立キャピタル損保
エイチ・エス損保	そんぽ24	富士火災
SBI損保	大同火災	三井住友海上
共栄火災	東京海上日動	三井ダイレクト
ジェイアイ	トーア再保険	明治安田損保

社団法人 日本損害保険協会
 〒101-8335 東京都千代田区神田淡路町 2-9
 URL <http://www.sonpo.or.jp/>

【お問い合わせ先】

生活サービス部 安全安心推進グループ
 TEL 03-3255-1294 FAX 03-3255-1236